

R. ブラウニングの“Christmas-Eve”

—白光への恐怖から超克へ—

野口 忠 男

目 次

はじめに

- 1 白光への恐怖
- 2 作品の背景
- 3 “Christmas-Eve”を読む
 - (i) 非国教徒のチャペル
 - (ii) 啓示宗教 — キリストの出現
 - (iii) ローマのサンピエトロ大聖堂
 - (iv) ゲッチングン大学の講義室
 - (v) 非国教徒のチャペル

おわりに

はじめに

“Christmas-Eve”は、R. ブラウニングの結婚後フローレンスで書かれ、1850年に出版された作品である。これは旅人である「私」が、夢の中で体験するクリスマス前夜の光景を物語る劇的なものであり、現実—夢—覚醒と言う循環の構造をなしている。Arthur Symonsは*An Introduction to the Study of Browning*の中で、この作品は“the chief work of Mr. Browning which deals directly and primarily with the subject of Christianity and the religious beliefs of the age”⁽¹⁾（「キリスト教の主題と当時の宗教的信仰を直接主要なものとして取り扱っているブラウニングの重要な作品である」）と述べ、“studies of religious life and thought”（「宗教的な生活と思想の研究」）であると語っている。確かにこの詩には、当時の英国の宗教事情が見受けられるし、ブラウニング自身の個人的な信仰の立場が示されているように思われる。一方E. LeRoy Lawsonは、*Very Sure of God*で、この詩は“his most explicit religious statements”⁽²⁾（「最もはっきりと宗教について述べたもの」）と述べながらも、“a search for a true form of worship”（「礼拝の正しい形態を求める」）ものでもないし、“a deeper understanding of God”（「神を深く理解すること」）でもない。この詩には語り手の心の発展も精神の危機も見られないし、“its lack of genuine tension”（「真の緊張が欠けている」）と語りあまり高く評価していない。それではブラウニングは、自伝的要素の強い作品“Christmas-Eve”をいかなる意図のもとに創作したのであろうか。詩人がキリスト教を

キーワード：キリスト教，白光への恐怖，劇的独白

直接的に主題にしなが、この作品を書いた必然性とは何かを内容と表現形式に留意しながら考察してみたい。

1 白光への恐怖

ブラウニングは、処女作*Pauline*以来、詩人自身の言葉で語るのではなく、想像上の人物が仮面を通して語る劇的な方法を用いて詩を書いてきた。しかし彼の詩はあまり認められず、詩人は主題の選択と詩作の方法について試行錯誤を繰り返してきた。

1845年1月13日付の手紙で、ブラウニングは愛するE. バレットに次の様に書いた。

You speak out, you, — I only make men and women speak — give you truth broken into prismatic hues, and fear the pure white light, even it is in me, but I am going to try; ...⁽³⁾

あなたは、はっきり語る、あなたは。——私はただ男と女に語らせるだけです——あなたに七色に分散した真実を描いてみせます、私には純粋な白光がこわいのです、たとえばそれが心の中にあっても。それでも私はやってみるつもりです。

バレットは、自分自身の声で語らないブラウニングに対して、1846年5月26日に次の手紙を書いた。

I do not think that, with all that music in you, only your own personality should be dump, nor that having thought so much and deeply on life and its ends, you should not teach what you have learnt, in the directest and most impressive way, the mask thrown off however moist with the breath. ... Therefore I do want you to do this with your surpassing power — it will be so easy to you to speak, and so noble, when spoken.⁽⁴⁾

あなたの内にはあれ程の音楽があるのに、あなた自身の個性そのものが埋没してしまうなんて、私には考えられませんし、人生やその目的について、とても豊かな深い考えがあるのに、学んだことをこの上なく直接に印象深い方法で、どんなにマスクが息で湿ってもそれを取り去り、伝えて下さらないなんて……ですから、あなたの卓越した力でこれをやってほしいのです。——あなたが語るのはやさしいことでしょう、そして語る時は堂々とやって下さい。

バレットは、「純粋な白光」を恐れるブラウニングに対して、彼の豊かな才能を認めながら、仮面を取り直接自分の声で語ることを力説している。ブラウニングが恐れる「純粋な白光」とはいかなるものであろうか。F. R. G. Duckworthは、*Browning Background and Conflict*の中で“white light”（「白光」）について次の様に述べている。

...the white light is the absolute truth or the whole of truth, and that again is something which, as a philosopher would say, unifies, or co-ordinates, or is a synthesis of, our whole experience.⁽⁵⁾

白光とは絶対的な真理あるいは真理の総体であり、哲学者が述べるように、私たちの全

経験を統合し、調和させ、あるいはその総合体と言えるものである。

Duckworthは、ブラウニングがP. B. シェリーの“the white radiance of eternity”（「永遠の白い光輝」）を考えていたことを示唆している。確かに「純粋な白光」は、プラトンのアイデアを想起させるものであるが、宗教上の問題として考えた場合、神の無限の光輝を暗示するものであると思われる。それではなぜブラウニングは、この「純粋な白光」を恐れるのであろうか。C. S. ルイスは『キリスト教の精髓』の中で、霊的世界の光を怖れることの原因を次のように述べている。

われわれ一人ひとりの内にある自然的生命は、自己中心的なもの、人から可愛がられ尊敬されたいと願うもの、他者の生活を食物にし全宇宙をさえも利用しようとするものである。それは、何よりも、他から干渉されることを嫌う。自分よりもっと善いもの、強いもの、あるいは高いもの、つまり自己を卑小と感ぜしめるようないっさいのものから、なるべく遠く離れていようとする。それは霊的世界の光や空気を怖れる。⁽⁶⁾

C. S. ルイスは、自然的生命が霊的生命に触れると、自己中心的なものが殺されてしまうと語っている。すでにブラウニングは最初の作品*Pauline*で強力な自我意識について述べている。

I am made up of an intensesst life,
Of a most clear idea of consciousness
Of self, distinct from all its qualities,
From all affections, passions, feelings, powers;
And thus far it exists, if tracked, in all:
But linked, in me, to self-supremacy,
Existing as a centre to all things,
Most potent to create and rule and call
Upon all things to minister to it;
And to a principle of restlessness
Which would be all, have, see, know, taste, feel, all
This is myself; ...⁽⁷⁾

私はとても力強い生命、
自我意識を言うきわめて明白な思念で形成されている。
この自我意識はすべての本性からはっきり区別されているもの、
愛情、情念、感情、力などとは区別されるもの。
だが自我意識は突き詰めてみれば、
かなりの程度まですべての人に生きている。
私の場合は、自己優越感と結び付き、
万象の中心として存在し、
実に力強く創造し、結合し、万象が私の自我に仕えるように求める。
またすべてとなり、万象をとらえ、見つめ、知り、味わい、感じたいという
休みなく働く力に結び付いている——
これが私そのものである。

私たちは自伝的色彩の強い*Pauline*の中に、万象の中心として存在する強力な自我を認めることができる。ブラウニングは、「純粋な白光」の下に自からの自我をさらけ出すことに、自己の存在への恐怖と創作への危機を感じていたと思われる。C. S. ルイス流に考えれば、それは死にも等しい行為だからである。しかしブラウニングが仮面を取り、「純粋な白光」を直視しなければならぬ時が訪れてきたのである。

2 作品の背景

私たちは、“Christmas-Eve”が書かれた背景について考えてみたい。1846年9月ブラウニングは、E. バレットとひそかに結婚し、イタリアへ行きフローレンスに滞在した。1848年病弱なバレットは、男の子を生み幸福な生活が続いていた。ところが翌年彼が深く慕っていた母が亡くなり詩人は深い悲しみに襲われたのであった。この母の死がもたらした空虚感と喪失感、この作品を書く上で個人的な動機の重要な部分をしめていると思われる。詩人は、喪失感を根底からいやしてくれる者の出現を願い、その存在との一体化を強く求めていたと考えられる。

また当時のヴィクトリア朝の精神風土は、科学的理性や合理的で功利的な考え方がますます人々の心に浸透し、彼らの行動を大きく左右していた。カーライルは、機械に支配される社会が、人間の知性と感性の両面を硬化させ、非人間的な社会を形成すると警鐘を鳴らしたのである。このような状況の中で、英国国教会は形骸化が進み、非国教徒の努力にもかかわらず、キリスト教が急速に力を失いつつあったのも事実である。ブラウニングはこの英国の宗教事情を考慮し、作品形成に用いていることはArthur Symonsが指摘している通りである。

この詩には内容とともに表現方法のことが考えられる。詩人としてのブラウニングにとって重要な問題は、仮面を取り自分の声で歌う方法を修得することである。自分の声で語ることができれば、表現方法はより拡大し、一人称による劇的独白の手法で詩を書くことが可能となる。“Christmas-Eve”創作の際、ブラウニングが心血をそそいだ点なのである。

3 “Christmas-Eve”を読む

(i) 非国教徒のチャペル

旅人である「私」が、片田舎のチャペルを訪れた時、雨が激しく降り続いていた。そこに集う人々は、粗野で無知な者たちであった。彼らは、ふとり疲れきった女、ひだちの悪い赤ん坊を抱いた母親、厚化粧の血の気のない売春婦らしい女、盗賊が悔い改めたような背の高い黄色い顔の男たちであった。チャペルへ入って行く人たちは、「私」を野獣かなにかのように見つめ、怪しげな男と見るのであった。異様な風情にうつる「私」は、孤独な存在であり、彼らとはある距離を置き、いわゆるアウトサイダーとしての立場に身を置いている。「私」の孤独の原因は、すでに見てきたように、慣れない異国での結婚生活、愛する母の死、表現形式へのこだわりが考えられる。

彼らに対して行われる牧師の説教は、鉛の塊のように、一方的に押しつける、程度の低いものであった。しかし「私」は、牧師の熱意とあこがれに心うたれたのである。説教を聞いていると眠気に襲われた。

「私」は、この息苦しく悪臭がたちこめるチャペルで、牧師の神の真理を語る言葉を、会衆と共に聞き、虚無感から逃れたいと願っていた。しかしここでは、会衆と牧師に嫌悪と失望を味わい、願いは成就されず夢の世界へ入っていく。

(ii) 啓示宗教——キリストの出現

激しく降り注いでいた雨はやみ、「私」は月の光を受けて、虹が夜空に美しく神秘的にかかる光景を見た。しかもそれは二重の虹であった。この神秘的な現象は、聖母を象徴する月が懐妊し、キリスト誕生を思わせる不思議なものであった。現に「私」の面前にキリストが立っているのである。

All at once I looked up with terror.
He was there.
He himself with his human air.
On the narrow pathway, just before.
I saw the back of him, no more —
He had left the chapel, then, as I.
I forgot all about the sky.
No face: only the sight
Of a sweepy garment, vast and white,
With a hem that I could recognize.
I felt terror, no surprise;
My mind filled with the cataract,
At one bound of the mighty fact. (11. 430-42)

突然 私は恐れをいだいて見上げた。
彼がそこに立っていた。
彼は人間の姿をしていた、
細い小道のところ、すぐ目の前に。
彼の背中が見えた、それだけ——
彼は私と同様に、あの時、チャペルを後にしたのだった。
私は空のことはすべて忘れた。
顔は見えなかった、ただ見えたのは
引きずるような、大きな白い服、
私は気付いているすそのある服。
私は恐怖を覚えた。驚きではなかった。
私の心は洪水で満ちあふれていた、
力強い事実に関心がおどっていた。

「私」が恐れをもって見上げた方は、人間の姿をしたキリストである。「私」にはキリストの顔は見えず、ゆるやかな白い衣服を身にまとった後姿だけが見えた。「純粋な白光」に恐怖を覚えるブラウニングを彷彿させる場面である。「私」は恐れを感じ、心は激流で満ざられてい

た。次第に「私」は、キリストの顔全体をまともに眺められるようになる。キリストの白い衣で示される白のイメージは、象徴的な意味を有するものである。「私」は「月の光の白さ」に魅せられ、変容したキリストの姿は、「太陽の光」のように白く輝いていた。私たちは、「マタイ」17章2節の言葉を思い起こすことができる。「彼らの目の前でイエスの姿が変わり、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった。」またこれに似た体験は、「ヨハネの黙示録」第1章17節で、ヨハネは光り輝く「人の子」の姿を見て、恐れあまり死んだようになり、その足元に倒れてしまう。「私」の体験も上記の神秘的体験に通じるものである。

「私」の身体は衣の大きな渦巻きの中に巻き込まれながら、「私」は離れまいとして彼の衣のすそをしっかりと握っていた。キリストにしがみつく行為は、孤独な存在の「私」が、キリストの愛と力に全てをまかせる姿のなにもでもない。ここに至って「私」は神聖なる偉大な存在キリストを受け入れ、恐怖を乗り越えて新しい自己に目覚めていると言える。

自然を通して神の愛の現れを知る態度は、S. T. Coleridgeが「老水夫行」の中で海蛇を賛美する場面に認められる。またWordsworthが万象の中心に偉大な力を抱えるロマン主義的な直観に通じるものである。ブラウニングと同時代のA. Tennysonが*In Memoriam*で表現しているキリストの顕現も同様な詩精神であると言える。詩人ブラウニングの宗教観の核心にあるものは、この神の顕現“the incarnation of God”ある。これは詩人が一瞬にして永遠の真理を直感する詩的認識に基づいているものである。

(iii) ローマのサンピエトロ大聖堂

「私」は、一瞬のうちに、『神曲』のダンテがウェルギリウスに案内されて森の中に行くように、イエスに導かれて、ローマのサンピエトロ大聖堂にやって来る。ここは田舎の簡素なむさ苦しいチャペルとは異なり、巨大で美しい荘厳な建物であった。大聖堂の内部では、おごそかにミサの儀式がとり行われており、中へ入って行ったキリストは、集まっている人々の祝福を受けている。新しい天が開け、かつては十字架にかけられ辱められた“Very man and very God”（「真の人にして真の神」）(1. 592) が、まさに“the one God, All in all”（「誰一の神、すべての者に内在するすべて」）(1. 598) として再臨すると思われる。

キリストが中に入っている間に、「私」は一人外に立ち止まっている。ここでも一人で離れて待つ孤独な姿が強調されている。しかし片田舎のチャペルの場合とは異なり、キリストが大聖堂の儀式に参列している人たちと「私」の仲保者となり、「私」の孤独を和らげてくれる。そのために「私」は余裕をもって自己の置かれている状況を冷静に眺めることができるようになる。「私」の目に映じたカトリック教徒は、迷信的な儀式に安じてはいるけれども、神を崇めようとする彼らの心は正しいと考える。次のように彼らは愛を強く求めてきたのである。

Love was the startling thing, the new:
Love was the all-sufficient too; (11. 687-8.)

愛は驚きであり、新しさであった。
愛はまた十分に満ちあふれていた。

(iv) ゲッチンゲン大学の講義室

「私」は知の満足を求め、キリストの渦巻く衣にすがり、ドイツのゲッチンゲン大学に飛んできた。ここは『イエス伝』の著者David H. Straussのような唯物主義的で史実一点張り、キリスト教を神話であると批評した学者が存在していたテュービンゲン大学を連想させるところである。

キリストは、ローマの時と同じように講義室に入って行ったが、「私」は半分開いた戸口から中の様子をうかがっていた。ここでも「私」は一定の距離を保ち、客観的に見ている。“The hawk-nosed high-cheek-boned Professor”(1. 813) (「鷹のような鼻をした、頬骨のはった教授」) が、咳ばらいをして講義を始める有様が詳細に述べられている。教授の主題は、キリスト教の起源についての話である。彼の言説によると、イエスは“A Man!—a right true man”(「一個の人間—正しい真の人間」) (1. 878) であり、神ではなく、人間としてあまりに偉大な業績があったために、ついに全知全能と信じられるようになったと言うのである。キリストは、“The natural sovereignty of our race”(「人類が生まれながらに有する主権」) (1. 891) を最初に主張しただけであると教授は説く。そこまで聞くと、「私」は失望し講義室の入口から外に出る。キリスト教に権威があるのは、キリストの神性から来るのであり、肝心なのは、教派や権威から離れた、狭い宗教の枠を取りはらった自由なものでなければならないと述べる。

This tolerance is a genial mood! (1. 1138.)

この寛容さはなごやかな気分！

Let me enjoy my own conviction, (1. 1144.)

自からの信念を楽しませてくれ。

信仰において大切なことは、自分の体験から得られた確信を守り、他人を認め、他人の信仰にとやかくくちばしをさしはさまないことである。

「私」がこの様に考えていると再び大嵐になり、キリストの衣は手から吹きとられ、嵐の中で不安を覚え、激しい恐怖心に襲われる。「私」はキリストの衣のそでにつかまり、神の恵みに包まれ、最初の片田舎の小さなチャペルへ舞い戻ってくる。例のふとった女もやせた男も依然として元の所にいる。「私」は居眠りをしていた間に、月夜の虹、サンピエトロ大聖堂、ゲッチンゲン大学の夢を見ていたのである。

(v) 非国教徒のチャペル

孤独な旅人である「私」は、信仰を求める者にとって大切なことは、神の命の水を飲むことにあると悟る。「私」のアウトサイダーとしての深い孤独な心は、神の命の水によっていやされ、命を与えられ、快活な精神に変わって行くことを知るのである。

I then, in ignorance and weakness,
Taking God's help, have attained to think
My heart does best to receive in meekness
That mode of worship, as most to his mind,

Where earthly aids being cast behind,
His All in All appears serene
With the thinnest human veil between,
Letting the mystic lamps, the seven,
 The many motions of his spirit,
Pass, as they list, to earth from heaven. (11. 1301-10.)

無知で弱い私は、
神の助けにあずかりながら、
心の中からあの礼拝形式を、従順な気持で、
神の思いに最もふさわしいものとして、
最善を尽くして受け入れようと思うようになった。
そこではこの世界の助けは背後に押しやられ、
完全な方が、静かに現われる。
神と私の間にとっても薄い人間のベールをまとして。
神秘の七つの燈火に 神の霊の多様な働きを
それらが望むままに、天から地へとならさせる。

「私」は、非国教会の牧師の見当違いな説教、教皇の虚飾、教授の理性偏重にもかかわらず、非国教会が最も当を得ていると思うのである。

「私」が非国教会を重視するのは、ブラウニングの幼い時の体験が考えられる。彼の両親は、WalworthのYork街の組合教会 (Congregational Church) に属し、日曜学校で子供たちを指導していた信仰心の深い人たちであった。彼は少年時代恵まれた宗教的な雰囲気の中で育てられたのである。

おわりに

私たちは「純粋な白光」を恐れる詩人ブラウニングの心の中に、強力な自我の存在を認めることが出来た。彼は“Christmas-Eve”の創作に当って、初めて本格的に「純粋な白光」に直面し、それを超克する方法を取り扱ったのである。力強い自我をキリストに委ね、キリストを通して神の愛と力を得るのである。「私」は新しい人間に生まれ変わり、永遠の命を生きる人間へと大きく変容している。

ブラウニングが宗教問題を、真実の自己になって、仮面をつけずに一人称で語ることによって、読む者に親近観、真実さ、迫真性を伝えることが可能となる。この一人称の語りによる劇的独白の手法は、いかなる題材をも表現できるものであり、詩人に詩作への光明をもたらすものであった。“Christmas-Eve”は読者から認められ、この経験を通してブラウニングは詩作に力を注ぐようになる。E. LeRoy Lawsonの低い評価とは異なり、妻バレットは夫の詩作の核心をよく知り、彼の詩の心を大きく開花させる存在であったのである。この詩は、主題と表現方法において、ブラウニングの詩作の中核に迫る重要な作品なのである。

【注】

- (1) Arthur Symons. *An Introduction to the Study of Browning*: Cassell & Company, Limited, 1886: 86.
- (2) E. LeRoy Lawson. *Very Sure of God*, Vanderbilt University Press, 1974: 59.
- (3) *The Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett Barrett*, Vol. I., Harper & Brothers, Publishers, 1898: 6.
- (4) *Ibid* Vol. II.: 180-1.
- (5) F. R. G. Duckworth. *Browning Background and Conflict*, Archon Books, 1966: 193-4.
- (6) C. S. ルイス『キリスト教の精髓』柳生直行訳, 新教出版社, 2005年, 272.
- (7) Robert Browning. *Pauline*. AMS Press, Inc., New York, 1966: 11.

[Abstract]

R. Browning's "Christmas-Eve":
From the Fear of White Light to its Conquest

Tadao NOGUCHI

R. Browning published the poem "Christmas-Eve" in 1850, four years after his marriage to Elizabeth Barrett. This poem is said to be one of his most explicit religious statements. In those days, he was suffering from fear of composing religious poems from the first person's point of view. He feared the pure white light, the absolute truth, and he could not speak of it in a directest way. However, he dared to throw off his mask or persona on the advice of E. Barrett and wrote this poem in the first person in the form of the dramatic monologue. He was able to find Christ and recognize God's love and power through him. He discovered a new self and gained a useful method of poetic expression as the first person speaker. This poem was favorably received and after that Browning could produce many excellent poems.

Key Words: Christianity, Pure White Light, Dramatic Monologue